

光市文化センターと玉井喜作

Hikari City Cultural Center and Kusak TAMAI

泉 健

Ken IZUMI

2006年10月5日受理

序

玉井喜作は明治維新を目前にした1866年（慶応2）5月18日に、現在の山口県光市で生まれた。生家は日本酒の醸造元であった。現在出身地の光市文化センターには、玉井喜作関係の資料の内、日記帳や私信やパスポートや写真アルバムなど、彼に関する一次資料のほとんどが収蔵されている。またここには、ベルリンで出版されたシベリア横断の記録『西比利亜征伐紀行』（独文）や『Ost=Asien』（第1巻～4巻）など、玉井喜作の生涯を語る上で重要な二次資料のいくつかも収められている。本稿は、この光市文化センターに収蔵されている玉井喜作関係資料全体の概要を整理し、それらの資料が同センターに収蔵された経緯を辿り、さらに近隣の周南市立図書館に所蔵されている今ひとつの写真資料も紹介していくものである。

筆者はこれまで光市文化センターをたびたび訪れているのだが、今年（2006年/平成18）も今回の拙稿を書くために、8月16日と17日に同センターで再度調査を行った。具体的な分析が詳しくできなかった資料もいくつか残ったが、それらは今後の課題として、次回以降の論文の中で明らかにしていきたい。今回はどのような資料が存在しているかという概要の把握に重点を置き、いくつかの重要な資料に関しては写真も掲載して紹介していきたい。

前回の拙稿「文献に見る玉井喜作」（泉健 2006）では、1895年（明治28）から2006年（平成18）までの玉井喜作に関する二次資料（書籍・新聞記事・雑誌論文など）を整理、紹介し、それらを基にして彼の生涯の再構成を試みた。そこで今回はその続きとして、前回言及することのできなかった一次資料を中心としながら、玉井喜作のもう少し具体的な人間像を浮かび上がらせていきたいと考えている。なお本稿の掲載誌の性格上、本文の中では人名に対する敬称は略させていだいた。ご寛恕を請う次第である。

I. 資料の全体像

1. 玉井喜作の資料と光市文化センター

光市文化センターは1980年（昭和55）11月に開館した。同センターでは、今から20年前に玉井喜作展を開催している。これは「ふるさと人物銘々伝」というシリーズの第一回目として、1986年の1月16日から同年2月20日までの期間に開催されたものである（光市管理調整部 1986：4）。そしてそれからちょうど20年経った今年2006年は、玉井喜作没後100年という年に当たっている。そこで常設展の企画として、2006年9月11日から第二回目の玉井喜作展が開催されている。

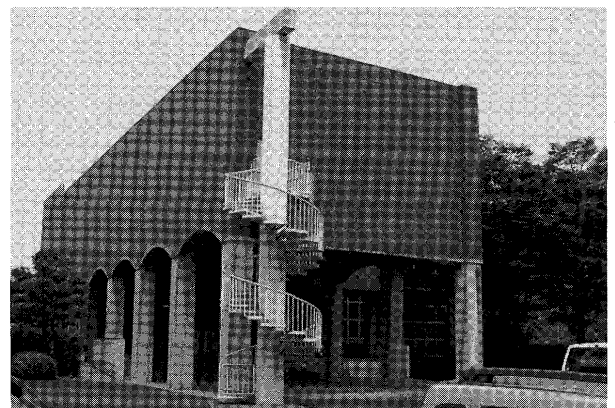


写真1 光市文化センター

ところで、この第一回目の玉井喜作展が開催された時に、多くの資料を収集したのが泉巖であった。彼は、玉井喜作の兄玉井熊輔の孫であり、1980年代前半に、主に親戚を中心として玉井喜作の資料を収集した。前回の拙稿にも記したように（泉健 2006：40-41）、玉井喜作再発見の道のりにはこれまで3つの波が存在した。第1は第二次世界大戦末期（1940年代前半）。第2は『シベリア隊商紀行』（筑摩書房、1963）の翻訳刊行。第3は湯郷将和『キサク・タマイの冒険』（新人物往来社、1989）以降である。第1の、明治時代ベルリンで日独交流に尽くした人物としての玉井への注目の背景には、日独伊三国軍事同盟の締結（1940）が存在した。第2は、玉井のシベリア横断をクローズアップするこ

とになり、その後しばらく冒険家玉井喜作というイメージが続いた。そして第3の波以降、初めて『Ost=Asien』の刊行と彼のベルリン時代が注目されるようになった。

泉巖の諸資料の収集は、この第3の波を引き起こすきっかけとなるものであった。そしてこの第一回目の玉井喜作展の後、それらの資料をもとに書かれた初めての本格的な伝記が、湯郷将和『キサク・タマイの冒険』であった。従って、現在光市文化センターに所蔵されているのは、この時に泉巖が親族に働きかけて寄託した資料が中心になっている。その寄託者は玉井喜作の孫の玉井満夫と高橋祐枝である。なお今回の調査で、それ以外に山本友一という方の寄贈された資料を見つけることができた。それでは次節以下、具体的な資料を見ていきたい。

2. 光市文化センターの所蔵品目録一覧

光市文化センターの玉井喜作関係の資料は、その寄贈者・寄託者などによって4種類に分類することができる。『光市文化センター所蔵品目録 1984年度版』に掲載されている順番に従って列記すると、以下のようになる。すなわち山本友一寄贈、玉井満夫寄託、高橋祐枝寄託、所蔵目録未記載の資料の4種類である(光市文化センター 1985: 56-57, 67, 74)。さらに玉井満夫と高橋祐枝の寄託資料には、明治時代のものと、昭和時代のものがある。次にまずその一覧を掲載し、その後個々の資料の説明を加えていき、重要なものについては写真を掲載していきたい。以下、1)～4)の各項の最初のアلفベットと数字は、光市文化センターで付けられた整理番号である。

1) 山本友一寄贈

- A-12-1-186 絵葉書26枚
- A-12-1-189 アメリカ陸軍葉書2枚
- A-12-1-190 切手271枚
- A-12-1-191 発行切手カタログ集
- A-12-1-192 コイン48枚
- A-12-1-193 世界切手発行国名見出し
- A-12-7-8 日露戦争戦勝記念写真11枚
- A-12-7-9 写真8枚

2) 玉井満夫寄託

①明治時代の資料

- A-12-1-200 速成学館生徒名簿1
- A-12-1-201 速成学館生徒名簿2
- A-12-1-202 速成学館仮規則
- A-12-1-203 札幌農学校辞令
- A-12-1-204 掛軸(玉井喜作肖像)
- A-12-1-205 玉井喜作遺墨(偶成)
- A-12-1-206 日記帳類9冊
- A-12-1-207 パスポート2枚
- A-12-1-208 写真付葉書4枚

- A-12-1-209 感謝状(日本赤十字社その他15枚)
- A-12-1-210 追悼会案内状
- A-12-1-211 弔辞2通
- A-12-1-212 玉井学田規定
- A-12-7-4 写真(玉井喜作肖像; 厚紙版)

②昭和時代の資料

- A-14-1-182 『サンデー毎日』1942年10月18日号
- A-14-1-183 大阪毎日新聞; 1942年9月24日

3) 高橋祐枝寄託

①明治時代の資料

- A-12-1-213 『Kisak Tamai. Karawanen - Reise in Sibirien. 西比利亞征伐紀行』Berlin, Karl Siegismund (1898年、独文)
- A-12-1-214 雑誌『Ost=Asien』No.92、1905年11月号
- A-12-1-215 書簡類45点
- A-12-7-5 アルバム-1(写真)
- A-12-7-6 アルバム-2(絵葉書)
- A-12-7-7 アルバム-3(絵葉書)

②昭和時代の資料

- A-14-4-10 大阪毎日新聞(山口版)切抜と『^{はるびん}ハル濱東京外語同窓会報』第10号、1944年
- A-15-1-45 『芸林』10巻3号、1963年2月
- A-15-4-8 新聞切抜3件; 1942、1962、1963年

4) 所蔵目録未記載の資料

- A-12-1-884 『Ost=Asien』Bd.1, 1898~1899年
- A-12-1-885 『Ost=Asien』Bd.2, 1899~1900年
- A-12-1-886 『Ost=Asien』Bd.3, 1900~1901年
- A-12-1-887 『Ost=Asien』Bd.4, 1901~1902年
(コピー) 玉井喜作宅における寄せ書き

II. 山本友一寄贈の所蔵資料

次に各分類の内容を具体的に見ていきたい。以下の説明では、各所蔵品整理番号の最初の2項目まで、すなわちA-12、A-14、A-15は省略している。まず最初の山本友一寄贈の品は、すべて所蔵品目録に記載されている。寄贈者の山本友一は、玉井喜作と血縁関係にある人物ではない。この資料の入った箱には、寄贈の経緯が書かれた手紙が入っていた。それによると、同氏20歳の昭和6年頃、玉井喜作の未亡人エツとその家族が光市室積町北町に住んでおり、その時に譲り受けたものということであった。おそらく近所に住んでいた人物であろう。

7-8の日露戦争戦勝記念写真11枚と1-186の絵葉書26枚、および1-189のアメリカ陸軍葉書2枚は、玉井喜作の生涯を語る上ではそれほど重要なものではなかった。

整理番号7-9の写真8枚は、伊藤博文・大山巖・児玉源太郎・野津道貫など、いずれも明治時代の政治家・

軍人のものである。これらの中で、玉井喜作がベルリンで直接会っているのは伊藤博文のみである。『Ost=Asien』No.46 (1902年1月号) 441ページには、ベルリンの日本倶楽部で同メンバーと写っている伊藤博文の写真が掲載されている(泉健 2002:138)。伊藤博文の出身地は、現在の山口県光市^{つかり}東荷である。これは玉井喜作の生家(本稿p.35参照)のすぐ近くであり、約8kmしか離れていない。それだけに親しみを感じるのか、玉井は『Ost=Asien』のNo.14とNo.15 (1899年4~5月号)の2回に亘って伊藤の半生の記を書いている(泉健 2002:117-118)。

興味を引かれたのは、1-192のコインと1-190の切手であった。コインにはドイツ、オーストリア、イギリス、オランダ、ベルギー、イタリア、ポルトガル、スペイン、アメリカ、インドのものがあつた。切手もかなり多くの国のものがあつた。大学の研究紀要などは、他大学のそれと相互に送付しあうことが普通であるが、『Ost=Asien』も他国の雑誌と交互に送付をしており、切手はそれらの国々のものである。またオーストリア、イギリス、オランダ、イタリア、アメリカなどのコインは、それらの国々への留学の帰途に、ベルリンの玉井家を訪れた人々が置いていったものと思われる。

そして1-193の世界切手発行国国名見出しは、『Ost=Asien』の交互送付をした相手先の国の確認をしたものであろう。またそれは、1-191の発行切手カタログ集とともに、世界の切手を収集するためにも利用されたものと思われる。というのが、光市文化センター所蔵以外の、現在筆者の手元に残されている玉井家の遺品の絵葉書には、切手の部分が切り取られているものがかなりあるからである。玉井喜作の娘の内、次女の韶子か三女の文子が切手収集の趣味を持っていたのかもしれない。

Ⅲ. 玉井満夫寄託の所蔵資料

1. 明治時代の資料

1) 1-200~205, 7-4 札幌農学校辞令など

次に玉井満夫は、玉井喜作の長男太郎の次男である。従って彼の寄託した資料には、玉井喜作の生涯に直接関わるものが多い。1-200~202の速成学館というのは、玉井が20歳の時(1886年/明治19)に東京で始めたドイツ語を中心とした私塾である。この3点はその名簿と校則の類である。今回は名簿の調査まではできなかったが、詳しく見ていくとこの中に何人か、その後の明治時代を動かしていった人物が含まれているかもしれない。

1-203の札幌農学校辞令は2通あり、一つは採用通知状、今一つは辞職願への返答である。前者には「玉井喜作 雇申付 但月俸金三拾円 明治二十一年六月

二十三日 札幌農学校」と記されている。後者は玉井が農学校に提出した辞職願に対して、「雇 玉井喜作 依願解雇 明治二十四年三月三十一日 札幌農学校」と記されている。これは、採用されて数年後に玉井が農業を開始したためである(泉健 2006:30)。

1-204の掛軸(玉井喜作肖像)は水彩画である。玉井がシベリア横断直後に、その折の服装のままでベルリンの写真店において撮影した写真を、そのまま拡大したものである。作者名が、右下にローマ字でDaijiro Horiと記してある。玉井は後に、そのシベリア横断の体験をドイツ語で『Karawanen-Reise in Sibirien 西比利亜征槎紀行』(Kisak Tamai 1898)として出版した時に、最初のタイトルの下にこの写真を使っている。本稿32ページの写真6の左側がそれである。以下この著作は、ドイツ語の原著は『西比利亜征槎紀行』と表記し、また1963年の邦訳は『シベリア隊商紀行』と表記する。

他に玉井の書(1-205)や、ベルリンで正装した玉井の写真(7-4)もあるが、彼の足跡を知る上では、9冊の日記帳類(1-206)が重要である。次にそれを見ていきたい。

2) 1-206-1~9 日記帳類

日記帳類は9冊あり、それぞれ1-206-1~9までの整理番号が付けられている。個々の詳しい分析は今後の課題として、今回はとりあえず全体の概要を紹介しておきたい。

1-206-1 (縦14.7cm×横10.2cm×厚1.6cm)

これはロシア製の手帳であり、1893年(明治26)のものである。薄緑色の表紙で、中の記述は次のページの写真2のようにドイツ語が多い。

1-206-2 (縦16.1cm×横9.6cm×厚1cm)

これもロシア製の手帳であり、1894年(明治27)のものである。1-206-1と同じ薄緑色の表紙であるが、こちらはわずかに幅が狭く縦長である。中の記述は前者に比べると日本語が多い。

1-206-3 (縦36cm×横22.5cm×厚7mm)

これは上記2つのような市販の手帳ではなく、白い紙を糸で綴じた自家製のノートである。上半分の真ん中より少し上のあたりは、紙が劣化して、すでに数枚目あたりまで穴が空いている状態である。表紙には手書きで次のように記されている。「バイカル湖西岸クニニチュナーヤー駅出発以来イルクーツク滞在中艱難日記、起 露暦千八百九十三年八月四日(明治二十六年八月一六日 水曜日)、至 露暦千八百九十三年九月十四日(明治二十六年九月二十六日 火曜日)、四十日間日記」。

困窮生活の中で走り書きしたような部分も多く、非常に読みにくいものである。しかしありがたいことに、この日記は大島幹雄のホームページ「デラシネ通信」に、「玉井喜作イルクーツク艱難日記」として全5回に

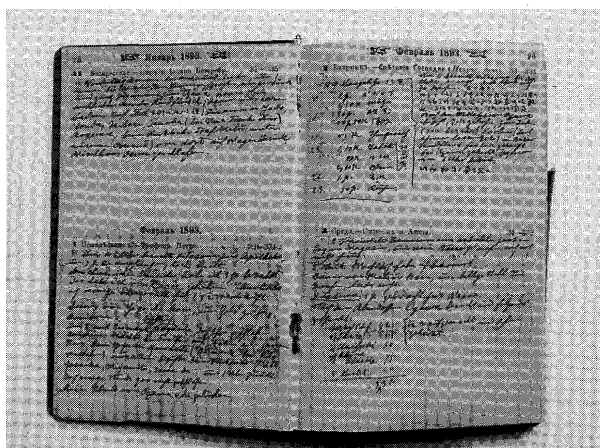


写真2 1893年（明治26）の日記帳（1-206-1）

分けて清書されている（大島幹雄 2001）。この作業は実にやっかいなものであったと思われる。大変な労作である。

1-206-4（縦27.5cm×横22cm×厚4mm）

これも白いノート用紙を糸で綴じた自家製のノートである。右の写真3がそれである。上記のイルクーツク滞在中艱難日記と同じく、かなり紙が劣化し、最上部の真ん中の部分は欠けている状態である。

表紙には手書きで次のように記されている。「イルクーツク府トムスク府間 千五百五十五里間 紀行（三十七日間）、起 明治二十六年十二月七日 木曜日（露暦 千八百九十三年十一月二十五日）、至 明治二十七年一月五日 曜日（露暦 千八百九十三年十二月二十四日）。」後者の曜日の部分は「曜日」の文字だけ記入されて、その前の具体的な曜日は書かれていない。

玉井喜作がベルリンに到着後出版した既述の『西比利亜征槎紀行』は、この日記をもとに書かれたものである。過酷な旅の合間に書き綴っただけに、この日記もかなり読みにくい。しかし上記のイルクーツク滞在中艱難日記と同じく、これも大島幹雄のホームページ「デラシネ通信」に、「玉井喜作 イルクーツク・トムスクの旅」（大島幹雄 2002）として全5回に分けて清書されている。「デラシネ通信」のこの2つの清書は、玉井喜作のシベリア横断を研究する者にとっては、非常に貴重な資料となっている。

1-206-5（縦21.2cm×横13.5cm×厚2mm）

これも白いノート用紙を糸で綴じた自家製のノートである。表紙に「明治二十七年一月六日 露暦千八百九十三年十二月二十五日 都務斯区到着翌日」と記されている。これは1月5日にトムスクに着いた翌日からのトムスク滞在中の日記・メモのようであり、最後の方には手紙を発信した記録も少し記入されている。

1-206-6（縦20.6cm×横16.8cm×厚5mm）

これはハードカバーのついたノートであり、表紙には「日本出発後 発信簿」と書かれている。文字通り、日本を出発して以来投函した郵便の記録が、克明に記

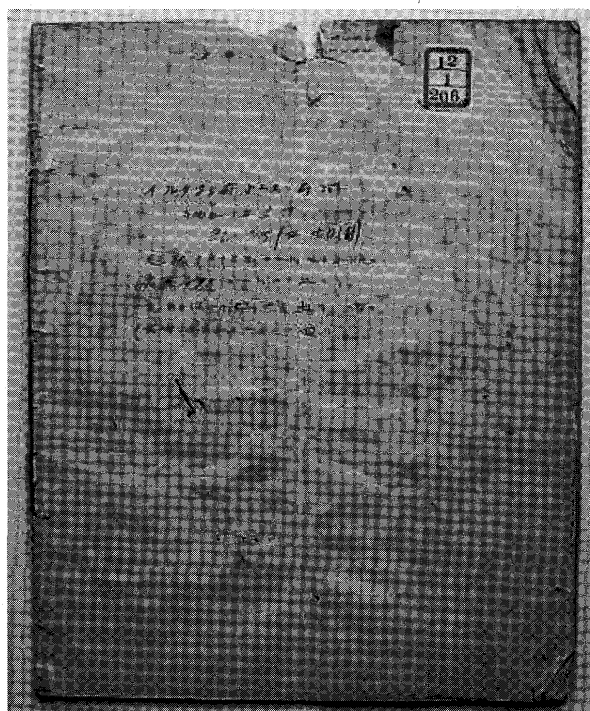


写真3 『西比利亜征槎紀行』の元になった日記

録されている。これは、玉井喜作の人間関係や、彼が興味を懐いていたことなどを知る上で貴重なノートである。

例えばこの中の32ページには、1894年（明治27）10月31日に、日本の土谷遼三郎にいくつかの探検記の送付を依頼したことが記されている。これは玉井の『西比利亜征槎紀行』の付録に付けられた「百年前、日本人数名よるシベリア経由の世界紀行」を、玉井がいつ知ったかを知る上で重要な手がかりとなる（泉健 2006：32-33参照）。このノートは今後詳しく分析していきたいと考えている。

1-206-7（縦18cm×横11.7cm×厚4mm）

これは1906年、つまり玉井が亡くなる年の彼の預金通帳である。これもハードカバーがついており、表紙に「DEUTSCHE BANK Depositen-Conto-Buch」と印刷されている。手帳サイズのものである。

1-206-8（縦21.5cm×横17cm×厚3mm）

ハードカバーがついたこのノートはメモ帳のようである。

1-206-9（縦20.8cm×横17.3cm×厚6mm）

これもハードカバーがついており、1ページ目に「明治二十七年一月 西部西比利亜 都務斯区滞在中雑記 全世界漫遊途次 玉井喜作」と記されている。つまりトムスク滞在中の雑記帳・日記であり、トムスク大学の歴史や、1894年（明治27）1月7日以降の日記などが記述されている。大島幹雄『シベリア漂流』の第8章は、この「トムスク府滞在中日記」と既述の1-206-5のトムスク滞在中のメモに基づいて書かれている（大島幹雄 1998：188-206）。

3) 1-207, 208 パスポート、写真付き絵葉書

1-207のパスポート2枚の内、1枚は日本政府の発行した玉井のパスポートであり、今1枚はロシア政府が発行したビザである（湯郷将和 1989：口絵2の写真参照）。

1-208の写真付葉書には、玉井喜作がベルリンで作成した絵葉書「長州武士山根孝中」と「ベルリンの花祭り：1901年4月8日」も含まれている。前者の山根孝中は山根正次の父である。正次は萩の明倫館でヒラー、R.にドイツ語を教わり、後に1900年のパリ万博の折にヨーロッパに行き、ベルリンで旧師と会っている（泉健 2006：39）。後者の「ベルリンの花祭り」の写真はすでに拙稿に掲載している（泉健 2004a：55、また泉健 2006：39も参照）。

またこの葉書の中には、玉井喜作の未亡人エツの礼状も含まれている。これは玉井喜作の追悼会に対する礼状である。この追悼会は、玉井の遺族の帰国後の1907年（明治40）2月21日に、東京上野の精養軒で開催された。翌22日の『万朝報』にはこの追悼会の様子が報告されており、その全文を湯郷将和『キサク・タマイの冒険』で読むことが出来る（湯郷将和 1989：237-238）。

4) 1-210 追悼会案内状

①発起人の中に田中正平の名前

また1-210の追悼会案内状はこの時のものであり、その文面は次の通りである。旧字体の漢字は新字体に直し、句読点が全く無いので適宜補った。

「拝啓 陳者故東亜主筆玉井喜作君遺族今回帰朝を好機とし、本月二一日午後五時上野精養軒にて追悼会を催し度候に付き、万障御差操の上可成同君の知人御誘合され御臨席被成下度、此段御案内申上候（会費金二円）。日付は「明治四〇年二月一五日」であり、その後に発起人57名の名前が記されている。

発起人の主な人物を挙げてみると、以下のような人々の名前が記されている。括弧内はそれぞれの専門分野もしくは肩書である。泉谷氏一（印刷・写真）、巖谷季雄（「小波」児童文学者）、蘆百壽（外交官）、原田貞介（土木工学）、大井菊太郎（将官級軍人）、大村仁太郎（ドイツ語教育）、柏村貞一（宮中医）、田中正平（音楽学者）、津軽英麿（後に貴族院議員）、長岡外史（将官級軍人）、長島鷲太郎（法律家）、柳澤保恵（統計学者）、山根正次（医師、後に衆議院議員）、山田鉄蔵（医師）、小林源蔵（後に衆議院議員）、姉崎正治（宗教学者）、宮本叔（医学者）などである。

②田中正平の留学

筆者は音楽学を専門としていることもあって、これらの人物の中で、特に田中正平（1862～1945）の名前があることに驚いている。田中正平は純正調オルガンの発明者として有名な人物であるが、なぜ彼の名前がこんな所に、というのが最初の印象であった。しかし

田中と玉井の伝記を調べてみると、両者のベルリン滞在の時期が5年間重なっていることを知り、これがまぎれもなくあの田中正平であることがわかった。

田中は1882年（明治15）に東京大学を卒業後、1884年（明治17）に森鷗外とともにベルリンに留学した。そしてベルリンではヘルムホルツ、H.について音響学を研究している。その後田中はそのままベルリンに滞在し、帰国はそれから15年後の1899年（明治32）4月であった（伊藤完夫 1968：90-91）。その間1889年（明治22）には純正調の理論、及び独自の純正調オルガンを公表し、ヴァイオリニストのヨアヒム、J.と合奏をしている（天野健作 2002：468-469）。

田中が帰国した翌年の1900年（明治33）には、音響心理学者シュトゥンプフ、C.が、ベルリン大学の心理学研究所にベルリン・フォノグラム・アルヒーフ（Berlin Phonogrammarchiv）を併設した。彼はここを拠点に、弟子のアブラハム、O.とホルンボステル、E.を協力者として、発明後間もない蓄音機を使い諸民族の音楽を記録・採譜した。やがてここはドイツの比較音楽学のメッカとなっていく。川上貞奴一座の音楽を録音したもの、彼らであった（泉健 2004b：82）。

③田中正平と玉井喜作の接点

一方、玉井喜作がシベリア経由でベルリンに到着したのは1894年（明治27）であり、これは森鷗外・田中正平のちょうど10年後である。そして玉井は、1895年夏学期から1896年夏学期までベルリン大学に在籍している。その後1898年（明治31）初めに『西比利亜征槎紀行』（Kisak Tamai 1898）を出版し、同年春から『Ost=Asien』を刊行し始めた。従って田中正平と玉井喜作は、玉井のベルリン到着の1894年（明治27）から田中の帰国の1899年（明治32）まで、ベルリンで5年間を共に過ごしているのである。

確かに、玉井喜作がベルリンに着いてから『西比利亜征槎紀行』を出版する1898年初め頃までは、両者の接触は無かったかもしれない。しかしその出版により、玉井が多少ベルリンの有名人になって以降の1年4ヶ月近くは、頻繁な交流は無かったとしても、当然両者はベルリンで出会ったことと思われる。当時のベルリンにおける日本人社会はその人数も非常に少なく、その交流は独和会や日本倶楽部などを通じて盛んに行われていたからである。また玉井家は、ベルリンの私設領事館とも言われたほどに日本人の出入りが多かった所でもあった。

このような時に役立つのが『玉井喜作宅における寄せ書き』（泉巖 1986a）であるが、これは1900年（明治33）から始まっている。つまり田中正平帰国の翌年からであるため、この寄せ書き帳には田中正平の名前は出てこない。いずれにせよ、玉井喜作の追悼会に田中正平の名前が記されているのは、以上の様な経緯があつてのことであろう。

5) 1-209, 211 感謝状15枚・弔辞2通

①感謝状15枚

1-209の15枚の感謝状のうち、9枚は日本赤十字社からのものである。日付は1904年(明治37)6月から1906年(明治39)9月までの期間、つまり日露戦争中から戦争後の時期である。この9枚はすべて、当時の日本赤十字社長であった松方正義の名義で贈られている。内容は、戦時救護費の寄付や書籍雑誌などの送付に対する礼状である。日露戦争に関連する感謝状は他にも、愛国婦人会から有功賞が2枚、帝国海事協会から義勇艦隊建設義捐金寄付に対する礼状が1枚残っている。

残る3枚の感謝状の内、1枚は、1906年6月8日付で宮城県知事・岩手県知事・福島県知事から贈られた、東北地方の飢饉に対する義捐金1,177マルクに対する感謝状である。また今1枚は、旧制の山口高等学校に玉井が『Ost=Asien』43冊を寄付したことに対する、山口県知事の感謝状である。最後の1枚は、ベルリンの日本倶楽部から、同倶楽部の設立以来の玉井の積極的な支援に対する感謝状である。

②弔辞2通

1-211の弔辞2通の内、1通は愛国婦人会長公爵夫人岩倉久子名義のものである。明治39年9月29日の日付が書かれており、以下の文章が記されている。旧字体の漢字は一部新字体に直し、句読点が全く無いので適宜補った。「佩二等有功賞玉井喜作氏、獨国滞在中業務の繁忙なるに拘はらず、常に本会事業の拡張を援助せられ、入会員募集に寄付金勧誘に著々効果を挙げられたること^{いとま}摺措に違あらず。一朝不幸にして病に罹られ、薬石驗なく遂に不帰の客と為られしを聞く。実に痛嘆に堪えざる所なり。爰に本会総裁殿下の台聞に達し、肅みて哀悼の意を表す」

今1通は、帝国海事協会理事長男爵有地品之允名義のものである。これには明治40年2月21日の日付が書かれているので、玉井の追悼会の日に遺族に手渡されたものであることがわかる。なお筆者の手元には、日本赤十字社長松方正義から贈られたもう一通の弔辞がある。これに関しては昨年の拙稿で紹介した(泉健 2005: 32)。

③ベルリンと日露戦争

ここで、これらの感謝状や弔辞の背景にある日露戦争当時のベルリンを知るために、一つのエピソードを取り上げてみたい。才神時雄『メドヴェージ村の日本人墓標』には、日露戦争直後の1905年(明治38)秋に、日本人捕虜がロシアからヨーロッパ経由で日本に帰還する経緯が記されている。日本人捕虜一行のベルリン到着は、同年12月17日であった(才神時雄 1983: 189)。この時、玉井喜作と老川茂信は、ベルリンで献身的に彼らの世話をしている(泉健 2002: 169-170の関連記事参照)。

ただし玉井喜作は、ちょうど2ヶ月前の10月17日に次女紹子を病気で失い、落胆していたであろうし、自らも翌1906年9月25日には結核で亡くなるので、この頃にはすでに体力も幾分衰えていたと思われる。そこで若い老川茂信が活躍することになる。老川は、玉井の没後『Ost=Asien』を継続発行した人物であるが、この時点ではまだ23歳である。彼が、日本に住む父老川正行にこの時の状況を手紙で伝えたものが、父正行の手によって老川家の累代記録に記されている。その中の、ベルリンで死去した傷病兵のことに触れた部分を紹介すると、その状況はおおよそ次のようなものであった。

④老川茂信の活躍

軽傷の兵隊は、そのままベルリンからハンブルク港まで行き、そこから日本へ帰国することができた。しかし重傷の傷病兵は、ベルリン郊外のグラボウゼーにある赤十字病院に入院した。しかしその中の2人は、それぞれ1906年(明治39)の1月9日と1月14日に死亡した。そこで火葬のために、老川茂信は2回とも、ベルリンから約70里(280km)も離れたゴータまで遺体に付き添って行き、そこで荼毘に付した。そして遺骨は再びベルリンまで持ち帰り、日本大使館を通じて、それぞれ両親の待つ長野県と広島県に送り届けられたということである(老川正行 1899-1924: 22-27)。

昨年の拙稿にも書いたように、キリスト教の葬儀は土葬のため、その地域では火葬場は非常に少ない。玉井喜作の葬儀の時も、老川茂信は火葬のために、その遺体を直線距離で約250kmも離れたハンブルクまで運ばなければならなかった(泉健 2005: 32)。ゴータは中部ドイツの町で、バッハ、J.S.の生まれたアイゼナハのすぐ近くであるが、ベルリンからの直線距離は、日本で言えば東京一名古屋間とほぼ同じである。

なお、この話の中のグラボウゼーにある赤十字病院とは、ベルリン中心部から北北西に約30km近く行った所の、オラーニエンブルクの町にある病院である。これに関しては、『Ost=Asien』No.94号とNo.95号(1906年/明治39年の1月号p.424と2月号p.466)に掲載されている同名の連載記事、「オラーニエンブルクのグラボウゼーにおける日本人」に詳しくその経緯が記されている(泉健 2002: 170)。

また、老川正行の記した累代記録とは、和紙を綴じた冊子に毛筆で老川家の歴史を書いたものである。これは縦24.4cm、横17.8cm、厚さ約9mmのほぼB5版サイズで、全78ページの内、17~30ページの部分に老川茂信のことが書かれている。表紙には、「明治参拾貳年四月求之 為末ノ代前代調査ノ為ニ綴之 四代目老川正行 老川家元祖ヨリ累代記録」と記されている。また最後の書き込みがなされているページには、大正十三年二月二日の日付が書かれている。従って、1899年(明治32)から1924年(大正13)の間に記述されたもので

あることがわかる。老川茂信のことを知る上で非常に重要な資料である。

6) 1-212 玉井学田規定

1-212の玉井学田規定とは、玉井喜作創案の一種の奨学金制度である。きっかけは1905年(明治38)10月17日の次女韶子の病死であった。この時の香典および残された韶子の貯金をもとに、韶子が日本で通った地福小学校の近くに耕地を購入し、やがては学校を建て図書館を併設し、地福村の子供たちの奨学資金にしようという計画であった。玉井学田規定にはこの計画が和紙を閉じた冊子(A5版8ページ)に毛筆で記されている。地福村は山口県の山口市と島根県の津和野町のちょうど中間あたりにある村で、玉井喜作の母の実家があった所である。

次女韶子の葬儀の様子などは拙稿「ベルリンの玉井喜作」で報告したが(泉健 2005:44-48)、韶子没の11ヶ月後には玉井喜作自身も亡くなっているため、この奨学金制度は計画のみに終わった。

2. 昭和時代の資料

1-182の『サンデー毎日』と1-183の大阪毎日新聞は、拙稿「文献に見る玉井喜作」で記したように、玉井喜作再発見の道の第一の波の資料に相当するものである(泉健 2006:40)。

前者は同誌1942年(昭和17)10月18日号であり、小谷茂夫「日独親善の人柱 “私設公使” 玉井喜作を憶ふ」が掲載されている(小谷茂夫 1942)。これは同時期の大阪毎日新聞(1-183)とともに、玉井喜作の生涯を初めて日本語で一般に紹介した文章である。当時まだ生存していた玉井喜作の妻エツに直接インタビューして書いた記事、という意味でも貴重である。ここには、明石元二郎大佐が日露戦争の折に行ったロシア軍の後方撓乱という諜報活動を、玉井喜作がベルリンでサポートしていた様子が描かれている(小谷茂夫 1942:48)。

後者の大阪毎日新聞の記事は、この『サンデー毎日』の3週間余り前、9月24日のものである。「50年前“枢軸を予約” 猛獣お伴のシベリヤ徒歩横断 伯林に微笑む快漢『玉井』の像」というタイトルで、玉井喜作の生涯の概要が紹介されている。内容は上記『サンデー毎日』と重なる部分も多いが、同誌にはない情報も含まれている。玉井は1906年9月25日に亡くなっているため、この記事は没後36年目の命日の前日に掲載されたことになる。

IV. 高橋祐枝寄託の所蔵資料

1. 明治時代の資料

1) 1-213～215 『西比利亞征槎紀行』など

高橋祐枝は、玉井喜作の四女喜代子の四女である。

玉井喜作の妻エツが、帰国後主に四女喜代子宅に住んでいたこともあって、彼女から寄託された資料にも重要なものが多い。

1-213の『西比利亞征槎紀行』は、玉井喜作が1898年(明治31)にベルリンで初めて出版したドイツ語の著書である。これは、玉井のシベリヤ横断の冒険の中で一番過酷な旅程となった、イルクーツクートムスク間1800km踏破の記録である。光市文化センター所蔵の本には、これが出版された時にドイツで出された新聞の書評が挟んであった。これは『Zeitspiegel』誌の絵入り付録娯楽版第6号(1898年)であり、B4版1ページ半に亘る長文の書評である。いつか機会を見てこの書評も紹介してみたいと考えている。

1-214の雑誌『Ost=Asien』No.92、1905年11月号には、312-313ページに玉井喜作の次女韶子の追悼記事が掲載されている。この資料の寄託者高橋祐枝の話によれば、帰国後の玉井エツ未亡人は四女高橋喜代子の家に長く住んでいたのだが、高橋の家にはかなりの数の『Ost=Asien』のバックナンバーが存在していたということであった。しかし現在残されているのは、次女韶子の追悼記事が掲載されているこの号のみである。

1-215の書簡類45点は、今後少しずつ内容を読み解いていけば、玉井喜作の生涯に関していくつか新たな知見が得られるかと思われる。

2) 7-5～7 写真アルバムと絵葉書アルバム

7-5のアルバム1は、玉井家の写真アルバムである。ドイツ製と思われるが、縦28cm、横17cm、厚7cmの頑丈な造りになっており、次のページの写真4のようにしっかりとした留め金がついている。全体で30ページからなっており、合計37枚の写真が納められている。

その次の写真5はその中の1枚である。左から順に三女文子、次女韶子、玉井喜作、四女喜代子、玉井エツの玉井一家と、泉谷氏一(東京三越写真部)、飯田精一(岩国出身・元衆議院議員)である。写真の右上に1905年3月5日の日付が記入されているので、これは、エツ夫人と韶子と文子がベルリンに到着してから2年半余り経った頃の写真であることがわかる。

7-6のアルバム2は、ドイツ製の絵葉書専用アルバムであり、縦28cm、横21cm、厚2cmのサイズである。全体で48ページあり、1ページに2枚入るので、合計96枚の絵葉書を入れることができるが、実際に入っていたのは86枚であった。絵柄は、戦艦、軍人、1902年大阪博覧会、日本赤十字社、女性などであった。ドイツ製が5枚(内3枚は写真を使った自家製絵葉書)、残りはすべて日本製である。

この中に1枚、玉井喜作が作成した未使用の絵葉書が含まれていた。これには、正装の男性の上半身の写真が印刷されており、「Dr. Tadao Honda」という名

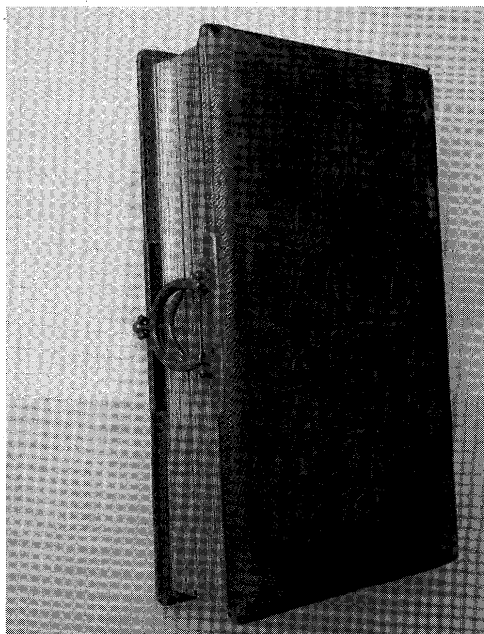


写真4 写真アルバム表紙

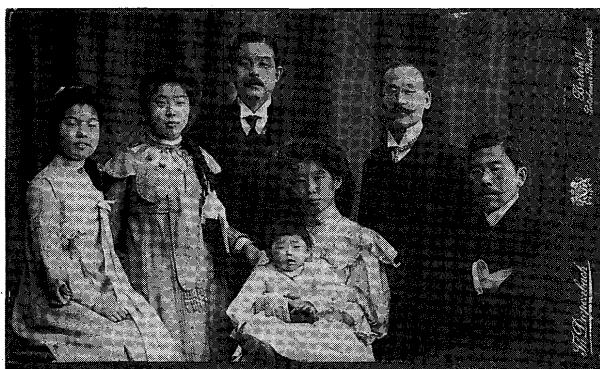


写真5 1902年3月5日の玉井一家と友人

前が記されている。そしてその下にドイツ語で、日本帝国海軍軍医総監の肩書が書かれている。また玉井作成以外のものでは、同じく未使用の絵葉書で、第一次世界大戦時の愛媛県松山のロシア人捕虜収容所のものが2枚あった。「日本松山ニ於ケル露國捕虜収容所大林寺」と「日本松山ニ於ケル露國捕虜下士以下収容所妙清寺」の2枚である。第一次世界大戦時の捕虜問題を研究している方には、この2枚は貴重な資料になると思われる。

7-7のアルバム3もドイツ製の絵葉書専用アルバムであり、これは7-6よりも大きく、縦38.4cm、横22.4cm、厚4.8cmのサイズである。全体で102ページあり、1ページに3枚入るので、合計306枚の絵葉書を入れることができるが、実際に入っていたのはわずかに21枚のみであった。絵柄は風景や日本の伝統的生活を描いたものであり、ドイツ製のものが12枚、日本製が9枚である。前のアルバム7-6に比べて、こちらの方がドイツ製絵葉書が多い。

2. 昭和時代の資料

4-10の大阪毎日新聞(山口版)切抜は、1942年(昭和17)10月15日の記事「旧情慕う知人の便り シベリヤ横断快挙 玉井氏の母堂を慰む」である。既述の同年9月24日の大阪毎日新聞の記事「50年前“枢軸を予約”」(1-183)は、玉井没後36年目の記事であり、ベルリン時代の旧知の人々は、この記事で玉井の遺族の様子を初めて知ったというケースが多かったようである。その人々が未亡人エツに宛てた手紙のことを伝えたのが、それに続くこの10月15日の記事である。この中には学習院大学科教授北里闌(泉健 2004a: 61)などの3通の手紙が紹介されている。

また同じ整理番号4-10の付いている『ハル濱東京外語同窓会報』1944年(昭和19)、第10号8~9ページには、太田為治「鉄道開通前のシベリヤの交通」が掲載されている。これは抜粋抄訳であるが、玉井のドイツ語による『西比利亜征槎紀行』の初めての日本語訳である。冒頭の「序」と「シベリアの交通制度」の部分が訳されている(泉健 2006: 31)。

1-45の『芸林』1963年2月、10巻3号、32~34ページには、小林健祐「シベリア隊商紀行—七十年前・一日本人の冒険記—」が掲載されている。これは一部翻訳を交えながら、玉井のドイツ語による『西比利亜征槎紀行』の概要を紹介したものである。小林健祐はこの年の10月にその全体を翻訳し、『シベリア隊商紀行』(筑摩書房、1963)として出版している(泉健 2006: 31)。

4-8の新聞切抜3件は以下の通りである。『東京日日新聞』1942年9月28日「伯林めざす快男児 徒歩でシベリヤ横断 50年前日独提携の魁」、『朝日新聞』1962年5月17日(下関版)「70年前シベリア踏破 残っていた玉井青年の独文紀行 孫娘たち翻訳を計画」、『朝日新聞』1963年10月22日(下関版)「還暦祝に間に合った翻訳 母に贈る祖父の日記 シベリア横断記実る」。最初の『東京日日新聞』の記事は、4日前の9月24日の大阪毎日新聞の記事(1-183)を元にして書いたと思われる、内容はほぼ共通である。次の2件の記事は、玉井の『西比利亜征槎紀行』の翻訳の依頼と、その完成を告げるものである(泉健 2006: 31)。

V. 所蔵目録未記載の資料

1. 『Ost=Asien』

A-12-1-884 『Ost=Asien』Bd.1, 1898~1899年

A-12-1-885 『Ost=Asien』Bd.2, 1899~1900年

A-12-1-886 『Ost=Asien』Bd.3, 1900~1901年

A-12-1-887 『Ost=Asien』Bd.4, 1901~1902年

これらは玉井喜作がベルリンで発行したドイツ語の月刊総合雑誌『Ost=Asien』の、各巻毎に製本されたものである。日本では、東京大学総合図書館に通巻

No.80号を除くすべてが揃っている。ドイツの大学でこれが全12巻完全に揃っているのは、ハイデルベルク大学の中国学研究所のみであった(泉健 2002:109)。

光市文化センターに所蔵されている第1巻から第4巻までの4冊は、北海道大学図書館が市場に出したものを、同センターが購入したものである。各巻に旧所蔵者である北海道大学図書館の印が押されている。次のページの写真6は、左側が通巻No.5号の裏表紙に掲載された玉井喜作の『西比利亞征槎紀行』(独文)の広告であり、右側が通巻No.6号の表紙である。

この4冊はどれも保存状態が良く、中の多くの写真は鮮明なままに残されている。次のページの写真7は、1901年4月3日に撮影されたベルリン日本倶楽部のメンバーである(同誌通巻No.38号p.55より)。本稿の写真は、デジタル・カメラで撮影したものを印刷しているために少し見にくいだが、最前列左から2人目が宮本叔(医学者)、以下右に松村松年(昆虫学)、泉谷氏一(印刷・写真)、巖谷小波(児童文学者)と並んでいる。また前から2列目の右端が玉井喜作、右から4人目が長岡外史(将官級軍人)であり、前から3列目の左から4人目が蘆百壽(外交官)である。

2. 1900年：ベルリンとパリ

1900年頃のパリに留学していた学生、芸術家、外交官たちの結成したパンテオン会に関しては、その回覧雑誌の覆刻と詳細な研究が出版されている(高階秀爾 2004)。そのメンバーはパリという土地柄、黒田清輝、浅井忠、岡田三郎助、和田英作など画家が中心であったが、学者や軍人なども加わり、多彩なものであった。

次の各括弧内はパリ滞在期間であるが、学者・詩人などには以下のような人々がいた。箕作元八(西洋史; 1900年8月26日~1901年7月下旬)、美濃部達吉(法学; 未詳1899年~1902年英・独・仏に留学)、土井晩翠(英文学・詩人; 1900年10月11日~1903年)、白鳥庸吉(東洋史; 未詳1901年~1903年独・露・仏などに留学)、芳賀矢一(国文学; 1900年10月20日~10月28日、1902年6月7日~6月28日)。また会員ではなかったが、関係者名簿には巖谷季雄(小波、児童文学; 1901年8月27日~9月3日)も挙げられている(高階秀爾 2004: 研究史料14-23)。

同時代のベルリンに関しても、次のページの写真7の例が示しているように、『Ost=Asien』を繙くことによってそれに類似した研究が可能となる。また次に紹介するベルリンの玉井家における寄せ書きも、その際重要な資料となるであろう。上記の学者・詩人などの内、ベルリンに滞在したのは次の5人であり、括弧内がハルトマン, R. の名簿によるベルリン大学在籍期間である(Hartmann, R. 1997)。ただし、巖谷季雄はベルリン大学附属東洋語学校講師としての滞在である。

箕作元八(1891年夏学期~1892年夏学期、1899年冬学期~1900年夏学期)、美濃部達吉(1900年夏学期~1900年冬学期)、白鳥庸吉(1901年冬学期~1902年夏学期)、芳賀矢一(1900年冬学期~1902年冬学期)、巖谷季雄(1900年~1902年)。箕作と白鳥に関してはまだ未確認であるが、美濃部と芳賀と巖谷は玉井家における寄せ書きにも名を連ねている。

3. 玉井喜作宅における寄せ書き(コピー)

これはベルリンの玉井喜作宅を訪問した人々が、記念に様々なことを綴った寄せ書き帳である。記入は1900年(明治33)3月30日から始まり、1906年(明治39)年3月15日で終わっている(泉健 2004a:46)。玉井が『Ost=Asien』を刊行し始めたのが1898年(明治31)の春であり、それから2年ほどして雑誌の発行もほぼ軌道に乗り、やっと少し落ちついてきたのであろう。寄せ書きの開始時期はその頃からである。また玉井が亡くなったのは1906年の9月25日なので、その約半年前にこの寄せ書きが終了していることがわかる。この寄せ書きの一部は、湯郷将和の著作(湯郷将和 1989:244-251)や拙稿(泉健 2004a:74)に掲載されている。

残念ながら、光市文化センターにはこの寄せ書きのオリジナルはなく、コピーのみが所蔵されている。それによって類推すれば、元の寄せ書き帳のサイズは、縦21.3cm、横約17cm。従ってほぼA5版のサイズであった。厚さは不詳である。しかし幸いなことに、この寄せ書きに関しては泉巖が復刻したものが存在しており、それによって全体を見ることが出来る(泉巖 1986a)。33ページの写真8がその復刻版である。これは1986年に50部復刻されたのだが、各所に配布し、現在ではこの復刻版も無くなっている。

4. 玉井喜作宅における寄せ書きの行方

筆者も、この寄せ書きのオリジナルを一度見てみたいと探していたのだが、この夏に泉巖の遺品を整理していた時にこれに関する資料が出てきて、その所在を確認することができた。現在の所有者は、玉井喜作の長男太郎の妻である玉井雪江であった。光市文化センターにおける既述の1986年の玉井喜作展がきっかけとなって、この寄せ書きの所在が玉井雪江から泉巖に告げられ、泉巖はそれを借用して復刻したのであった。

光市文化センターが、玉井喜作関係の資料の寄託者へ発行した資料受領証を調べてみると、1981年(昭和56)8月18日付で、当時の光市教育長賀根俊栄が寄託者玉井満夫に渡した寄託資料受領証には、この寄せ書きは記入されていない。また1982年(昭和57)2月10日付けで、同教育長が寄託者高橋祐枝に渡した寄託資料受領証にも、この寄せ書きは記入されていない。その後、この両資料を核として開催された第一回目の玉



写真6 『西比利亜征伐紀行』の広告と『Ost=Asien』No. 6号の表紙



写真7 Nippon-Club in Berlin

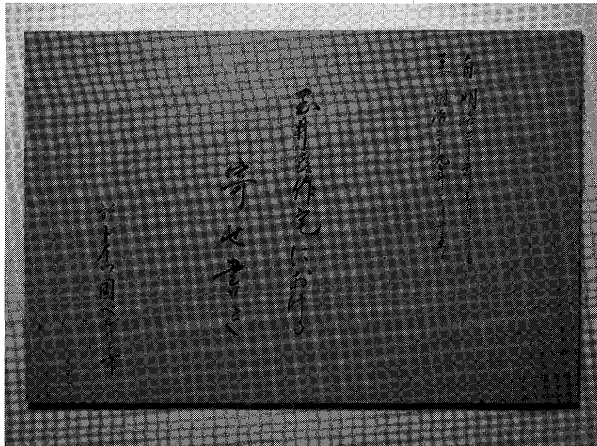


写真 8 玉井喜作宅における寄せ書き（復刻版）

井喜作展は、1986年の1月16日から2月20日までの間に開催された。

泉巖は玉井喜作関係の資料に関する記録ノートを3冊残しているのであるが、その中の『玉井喜作 資料 1』のノートの3ページ目に、この寄せ書きの貸借関係を記している。それには、1986年2月12日に玉井雪江からこの寄せ書きを受け取り、光市文化センターの玉井喜作展に展示し、展覧会終了後の同年3月8日に横浜在住の玉井雪江を訪問して返却したと記されている。泉巖の日本経済新聞のエッセイ（泉巖 1986b）にも、「貴重な資料の散逸を防ぐため、親族相談して出身地の光市文化センターに寄託した次第である。そのあと、この交友録が出てきたのだった」と書いている。この寄せ書きは、玉井喜作の四女喜代子と暮らしていた未亡人エツのもとにあったということであるが、何らかの機会に長男太郎の妻の家に渡ったのであろう。

Ⅵ. 光市文化センターの所蔵品以外の資料など

1. ベルリン防長会の写真

1) ベルリン防長会の写真の発見

以上が光市文化センターに所蔵されている玉井喜作関係の資料である。次に、それ以外の場所にある資料について言及しておきたい。既述のように、今から20年前の1986年、光市文化センターで「ふるさと人物銘々伝」の第一回目として最初の玉井喜作展が開催された。この時に、「ベルリン防長会」の写真が展示されていた。次の写真9がそれである。

この写真はその後、湯郷将和『キサク・タマイの冒険』の口絵3ページにも掲載された。筆者はこの写真の出典を『Ost=Asien』と思っていたのだが、その後この雑誌のどこを探しても、この写真を見つけることができなかった。これに関しても、この夏に泉巖の遺品を整理していた時に、これに関する資料が出てきてその謎が解けた。

この写真は、現在周南市立図書館に所蔵されている。



写真 9 ベルリン防長会

その経緯は以下の通りであった。山口県の岸浩（獣医学博士、1988年没）が、日本の獣医学の先達である時重初熊（1859-1913年、山口県周南市戸田出身、東京帝国大学農学部獣医学科教授）の伝記を調べていた時に、時重夫人の妹の実家である山田家においてこの写真を発見した。そしてそれを遺族から寄贈された岸は、その写真を当時の徳山市立中央図書館（現周南市立図書館）に寄贈したということであった。所蔵されているオリジナルの写真は、B4サイズを少し小さくしたくらいのかかなり大きなものである。

2) 時重初熊と玉井喜作

時重初熊は1898年（明31）8月31日からドイツに留学し、1902年（明治35）2月12日に帰国している。「キット、ボリンゲル、コッホ等に就いて専ら病理学を研究」（岸浩 1979a：46）と記されているので、留学先の拠点はベルリンである。この時重の留学の時期は、ちょうど玉井喜作が『Ost=Asien』を創刊（1898年4月）して以降の4年間とほぼ重なっている。

玉井は出身が現在の光市であり、時重の出身は比較的近くの周南市戸田であるので、玉井との行き来もあったものと思われる。時重もおそらくこのベルリン防長会に入っており、この日はたまたま出席できなかったのかもしれない。この写真の撮影された日時は、「1900年（明治33）10月21日」（郡司健 2005：38）である。

ベルリン防長会の成り立ちに関する詳細は不明であるが、当時のドイツ公使であった井上勝之助（この写真の後列左から5人目）を初めとして、玉井喜作（後列左から3人目）など、当時ベルリンに居住していた山口県（周“防”と“長”門）出身者を中心としてできたものであろう。いわばベルリンの山口県人会である。

3) ヒラー,R.とT.Yamadaのこと

この写真の中列右から2人目のヒラー,R.について



写真10 玉井喜作の生家

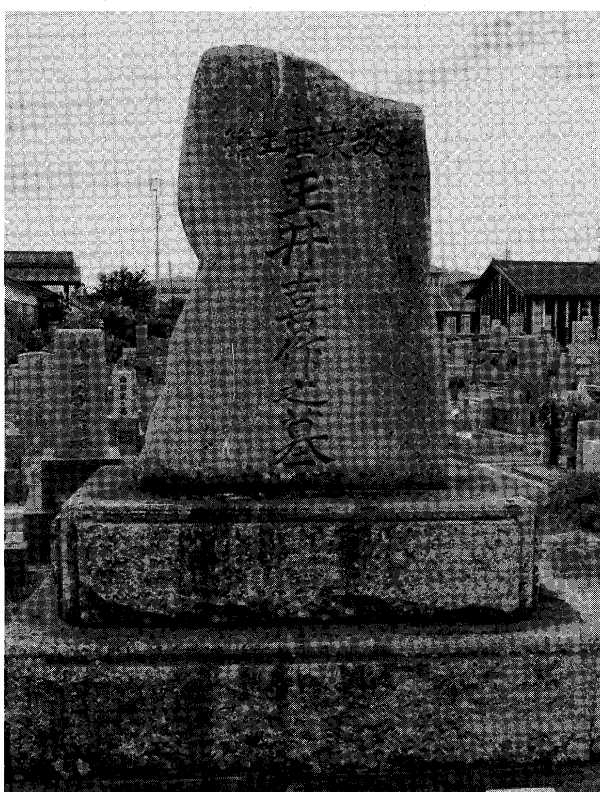


写真11 玉井喜作の墓

雑誌論文など、玉井喜作に関する二次資料を中心として彼の生涯の再構成を試みた。今回はその続きとして、日記帳、私信、写真アルバムなど、主に一次資料を中心として、もう少し具体的な玉井喜作の人間像を描くことに務めた。

玉井喜作の追悼会案内状によって、音楽学者田中正平と玉井との接点が明らかになったことは、今回の調査における大きな収穫であった。さらに『西比利亜征伐紀行』に挟まれていたかなり長い書評の発見は、もう一つの大きな収穫であった。これは今後機会を見て翻訳していきたい。

今回の光市文化センターでの調査とは別に、今一つ泉巖の遺品の整理も新たな発見を生んだ。泉巖は玉井

喜作の兄玉井熊輔の孫であり、1980年代に親戚を中心として玉井喜作の資料を収集した。今回その泉巖の遺品を少し時間をかけて整理することによって、これまで行方不明であった玉井家の寄せ書きのオリジナルの所在を確認することができた。

また泉巖の遺品の中に、獣医学者岸浩からの手紙と岸の書いた論文の抜刷が見つかり、それによって、周南市立図書館に所蔵されているベルリン防長会の写真がそこに納められた経緯が明らかになった。さらにその手紙は、この写真の中の人物の一人T.Yamadaの特定に関して新たな可能性を開いた。

この3年間は、主に玉井喜作とその周辺をめぐる基礎資料の調査を行ってきた(泉健 2005, 2006, 2007)。この資料調査は今回の拙稿で一応完了したので、今後は再び『Ost=Asien』に重点を置き、この雑誌の音楽・演劇などの論文に焦点を当てて研究を続けていきたいと考えている。

【引用・参考文献】

天野健作

2002年(平成14)『田中正平 ドイツ皇帝絶賛のオルガン発明者』産経新聞「日本人の足跡」取材班編『日本人の足跡 世紀を越えた「絆」求めて』(産経新聞ニュースサービス) pp.447-478.

泉巖

1986年a(昭和61)復刻『玉井喜作宅における寄せ書き 自明治33年3月30日—至明治39年3月15日』(私家版)

1986年b(昭和61)「芸妓に舞う明治のベルリン 祖父の『寄せ書き』から在住日本人の生活知る」『日本経済新聞』7月17日

泉健

2001年(平成13)「書評：Brenn, Wolfgang, Marie-Luise Goerke, hrsg., Berlin-Tōkyō: im 19. und 20. Jahrhundert. Berlin, Springer Verlag, 1997.」『音楽学』46巻3号pp.171-173.

2002年(平成14)「『Ost=Asien』研究～その1. 全目次」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第52集, pp.107-204.

2003年(平成15)「『Ost=Asien』研究～その2. 人名注解; 外国人編」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第53集, pp.33-71.

2004年a(平成16)「『Ost=Asien』研究～その3. 人名注解; 日本人編」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第54集, pp.43-79.

2004年b(平成16)「『Ost=Asien』研究～その4. 全目次; 独語版」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第54集, pp.81-179.

2004年c(平成16)「百年前のベルリンと曾祖父」『邦楽ジャーナル』Vol.215, 12月号p.21.

2005年(平成17)「ベルリンの玉井喜作」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第55集, pp.27-50.

2006年(平成18)「文献に見る玉井喜作—没後100年を記念して—」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第56集, pp.25-47.

2007年(平成19)「光市文化センターと玉井喜作」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第57集, pp.23-37.

伊藤完夫

- 1968年(昭和43)『田中正平と純正調』(音楽之友社)
- 岩倉規夫
1961年(昭和36)「西北利亜征伐紀行のこと」『統計』9月号、
後に同『読書清興』(汲古書院、1972) pp.33-36に所収。
- 江口雄輔
1994年(平成6)『久生十蘭』(白水社)
- 老川正行
1899年(明治32)-1924年(大正13)『老川家元祖ヨリ累代記録』
(私家版)
- 『大阪毎日新聞』
1942年a(昭和17)9月24日「50年前“枢軸を予約”猛獣お伴
のシベリヤ徒歩横断 伯林に微笑む快漢『玉井』の像」
1942年b(昭和17)10月15日「旧情慕う知人の便り シベリヤ
横断快拳 玉井氏の母堂を慰む」(山口版)
- 大島幹雄
1998年(平成10)『シベリア漂流～玉井喜作の生涯』(新潮社)
2001年(平成13)インターネット・サイト「デラシネ通信」よ
り「玉井喜作 イルクーツク艱難日記」(全5回)。「デラシ
ネ通信」>漂流民>玉井喜作>玉井喜作 イルクーツク艱
難日記。
<http://homepage2.nifty.com/deracine/draft/tamai/irkutsk-01.htm>
2002年(平成14)インターネット・サイト「デラシネ通信」よ
り「玉井喜作 イルクーツクトムスクの旅」(全5回)。「デ
ラシネ通信」>漂流民>玉井喜作>玉井喜作 イルクーツ
クトムスクの旅。
<http://homepage2.nifty.com/deracine/draft/tamai/tomsk-01.htm>
- 太田為治
1944(昭和19)「鉄道開通前のシベリヤの交通」『^{はるびん}ハルビン東京外
語同窓会報』1月31日発行 pp.8-9.
- 河村繁一
2001年(平成13)「日独文化交流を支えた人々 第2回玉井喜
作」『Die Brücke かけ橋』No.548,10月号(財団法人日独
協会)、pp.4-6.
- Kisak Tamai
1898年(明治31)Karawanen-Reise in Sibirien. Berlin,
Karl Siegmund. 1898. (邦訳:玉井喜作 1963)
- 岸浩
1979年a(昭和54)「獣医学博士 時重初熊先生年譜」『山口獣
医学雑誌』第6号、pp.39-44.
1979年b(昭和54)「時重初熊博士を偲んで」『山口獣医学雑誌』
第6号、pp.45-48.
- 郡司健
2005年(平成17)「ベルリンの玉井喜作とR.Hiller—1900年の
日独交流の一齣—」『大阪学院大学通信』第36巻5号、
pp.31-57.
2006年a(平成18)「玉井喜作、ベルリン散華—100年前の日独
交流の一齣—」『DER BOTE VON OSAKA』(大阪日独協
会会報)No.53、3月号、pp.4-6.
2006年b(平成18)「玉井喜作とReinhold Hiller—100年前の日
独交流の一齣—」『DER BOTE VON OSAKA』(大阪日独
協会会報)No.54、11月号、pp.5-8.
- 小谷茂夫
1942(昭和17)「日独親善の人柱 “私設公使” 玉井喜作を憶
ふ」『サンデー毎日』(通巻1201号)10月18日号、pp.46-48.
- 小林健祐
1963年(昭和38)「シベリア隊商紀行—七十年前・一日本人の
冒険記—」『芸林—郷土文化総合誌—』(芸林社)10巻2号、

- 2月号pp.32-34.
才神時雄
1983年(昭和58)『メドヴェージ村の日本人墓標』(中央公論
社;中公新書)
高階秀爾(監修)
2004年(平成16)『バリ1900年・日本人留学生の交遊—『パンテ
オン会雑誌』資料と研究』(ブリュッケ)
田中正平
1940年(昭和15)『日本和聲の基礎』(創元社)
玉井喜作
1963年(昭和38)『シベリア隊商紀行』小林健祐訳(筑摩書房
1963年)、中野好夫他編『世界ノンフィクション全集47』
pp.185-287(原著;1898)
『東京日日新聞』
1942年(昭和17)9月28日「伯林めざす快男児 徒歩でシベリ
ヤ横断 50年前日独提携の魁」
『東洋音楽学会第50回大会』
1999年(平成11)大会プログラムより;セッション「田中正平
が日本音楽実践に与えたインパクト」1.平塚知子「田中正
平の<音楽の発達>ヴィジョンにおける「日本音楽」の評
価」2.山田智恵子「田中正平による義太夫節の五線譜化」
3.藤田隆則「能の音楽が田中正平からうけた影響」
pp.20-22.
Hartmann, Rudolf
1997年(平成9)Japanische Studenten an der Berliner
Universität 1870-1914. Berlin, Mori-Ôgai-Gedenk
-stätte der Humboldt-Universität zu Berlin.
光市文化センター
1985年(昭和60)『光市文化センター所蔵品目録1984年度版』
光市管理調整部
1986年(昭和61)「誌上ギャラリー8 玉井喜作肖像画」『広報
ひかり』No.833、2月10日号、p.4.
久生十蘭
1970年(昭和45)「新西遊記」大佛次郎他編『久生十蘭全集II』
(三一書房)pp.134-156.
Hoppner, I., 関川富士子 hrsg.
2005年(平成17)Brückenbauer 日独交流の架け橋を築いた
人々. Berlin, Tokyo: Japanisch-Deutsches Zentrum
Berlin, Japanisch-Deutsche Gesellschaft.
森川潤
2004年(平成16)「明治三年二月の「大學規則」における「教
科」について—ドクトル・ベルリンの学校改革案との関わり
をめぐって—」『広島修大論集』第44巻、第2号(人文編)、
pp.1-43.
湯郷将和
1989年(平成1)『キサク・タマイの冒険』(新人物往来社)
寄田啓夫
1971年(昭和46)「山口藩独逸学校の成立について」『広島大学
教育学部紀要』第1部20号、pp.45-54.
1988年(昭和46)「山口藩独逸学校考補遺—ドクトル・ベルリ
ン失踪事件—」『香川大学教育学部研究報告』第1部第74号、
pp.1-16.
【正誤表】
拙稿『Ost=Asien』研究—その3.人名注解;日本人編』(2004
年a)の伊藤博文の項における訂正をしておきたい。53ページ
の下から7行目。
誤「13,31,」→正「13—14,31,」

【付記】

光市文化センター館長石村正彦氏には、今回の同センターにおける調査(2006年8月16日～17日)に関して格別のご配慮をいただいたことを記して、謝意を表する次第である。既述のように、光市文化センターの開館は1980年11月であった。現在光市文化振興会事務局長を務めておられる丸岡敦雄氏には、その翌年の1981年8月の玉井喜作関係の資料寄託の時以来、四半世紀に亘る長い間、それらの資料を管理していただいている。それに基づく玉井喜作展の開催や、筆者が何度か同センターへ調査に伺った際のご配慮、また今回はベルリン防長会の写真のT.Yamadaなる人物の特定に関して精細な研究結果をご教示いただくなど、お礼の申し上げようもないほどである。ここに記して深謝の意を表したい。

玉井喜作が1906年9月25日に亡くなって以降、『Ost=Asien』を受け継いで発行していったのは老川茂信氏であった。その茂信氏の弟、老川正治氏の孫にあたる老川伸氏(栃栗本鐵工所環境事業部営業部営業企画担当部長 2006年10月現

在)からは、同氏の曾祖父(茂信氏と正治氏の父)にあたる老川正行氏の書かれた『老川家元祖ヨリ累代記録』を見せていただいた。これにより、日露戦争直後の日本人捕虜の帰還における、ベルリンでの老川茂信氏の馳駆の労を紹介することができた(本稿p.28-29)。

玉井喜作は筆者の曾祖父である。残された手紙によると、玉井没後、老川茂信氏には未亡人玉井エツとその子供たちを多々気遣っていただいたようである(泉健 2006:40)。しかし両家の交流は、実質途絶えたままであった。老川伸氏と初めてお会いすることができたのは、今年(2006年)の9月5日であったが、考えてみると、これは両家にとっては、玉井喜作没後まさに100年ぶりの邂逅であった。大変貴重な資料を見せていただいた老川伸氏には、深くお礼申し上げる次第である。

なお今年の夏、老川茂信氏の著作『獨逸貨幣没落物語』(萬里閣、1931)を入手することができ、彼の『Ost=Asien』以降の足跡を今ひとつ辿ることができた。これも今年の大きな収穫であった。